

2021年8月15日（日）永眠者記念礼拝説教

『死んでも生きる』 井上隆晶牧師
ヘブライ 11章 13～16節、ヨハネ 11章 17～27、38～44節

①【死者のための祈り】

今日は永眠者記念礼拝です。毎年私たちは永眠された信仰の友や家族を覚えて礼拝します。旧約時代からイスラエルの民は死者のために祈ることをしてきました。教会もそれを受け継ぎ「死者のための祈り」をしてきました。またイエス様自身こう言っています。「はっきり言うておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」(マタイ 18:18～19) 地上で解くというのは「罪を解く(赦す)」という意味です。教会が地上で誰かの罪を赦せば、天でも赦されるという意味です。この誰かの中に生者も死者も、キリスト教信者も他宗教の人も入るのです。

●正教会の聖餐式では聖餐のたびに信者は家で焼いてきたパンと共に「生者と死者、信者と未信者の名前」を書いた紙を司祭に渡します。司祭は礼拝の前に別室でそれらの人の名前を読み上げながら、パンを削ります。礼拝の後で聖別されてイエス様の血となったぶどう酒が入った聖杯の中に、それらの記憶した人たちのパン屑を入れて、イエス様の血と一体にして、彼らの罪を赦して下さいと祈り、それをすべて司祭が飲み干します。それを聞いた時、私はすごいなあと思いました。つまり教会の執り成しの祈りによってすべての人が救われるというのです。

救いは個人のものではなく全体のもので、だから私たちは多くの人のために信仰し、祈らなければなりません。あなたの祈りは生者と死者を救います。

②【キリストにつながっている死者は今も生きている】

今日の福音書はラザロのよみがえりの話です。イエス様の親友でマルタ、マリア、ラザロという兄弟姉妹がいました。そのラザロが重い皮膚病に罹りついに亡くなってしまいました。イエス様が村についたのは、すでに彼が墓に葬られて四日目のことでした。姉のマルタがイエス様一行を出迎え「あなたがここにいて下さったら、弟は死ななかつたでしょう。」という、イエス様は「あなたの兄弟は復活する」と言われます。マルタはイエス様が慰めてくれたのだと思い「終わりの日の復活の時に復活することは存じています」と答えます。「終わりの日」とはこの世が終わって新しい世界になる遠い将来の日のことであり、その日に復活することは知っています、と彼女は言ったのです。するとイエス様は「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ 11:25～26)と言われます。すごい言葉です。こんな言葉をはたして普通の人間が言えるでしょうか。イエス様はこう言われたのです。「マルタよ、あなたは復活を誤解している。死んだ

ら世の終わりに復活すると思っているかもしれないがそうではない。私が復活なのだ。私が命なのだ。目の前に復活と命が立っているではないか。私を信じ、私につながっている者はたとえ肉体は死んでも生きており、この世で信じている者は決して死なないのだ。」

この世の人は「死」とは肉体が朽ち、灰となり、目の前からその人がいなくなる
ことだと思っていますが、聖書が教えている「死」とはこれとは違い、神から離
れてしまうことをいいます。「命」とは神自身であり、神だけが持っているもので
す。私たちの命は限界あるもので「生命」と呼びます。外からの命を貰わなけれ
ばなくなってしまう充電式のような命です。その「命の神」から離れるので死ぬ
のです。ちょうど枝が幹から離れるので枯れるようなものです。だから私たちは
神から離れることを恐れます。礼拝をしなくなり、聖書も読まず、祈らず、神と
交わらなければ離れてゆきます。そしてやがて離れることに慣れ、神なしに生き
ることが平気になるのです。しかし再び神と交わりを始めれば、渴いた木が水を
吸い込むように元に戻ることが出来ます。

●コロナ感染症拡大で礼拝を辞め、オンラインや説教原稿だけで礼拝する教会が増えました。全然役に立たないことはありませんが、効果は半減します。何か違うのです。満たされません。なぜでしょう？そこには献げるという行為が少ないからではないのでしょうか。部屋でただ聞くだけで、体を献げ、時間を献げ、命を献げ、賛美を献げるといった行為が少ないのです。交わりとはこちらからも何かを
与えるから成り立つのでしょうか。礼拝とは神との交わりなのです。交わるから向
こうから命と力が入って来るのです。私たちクリスチャンにとって礼拝や祈りや
聖餐を食べる信仰生活は、毎日の「ご飯」のようなもの、「空気や水」のようなもの
なのです。ご飯を食べないと力が出ませんし、空気が薄くなると苦しくなりま
す。礼拝をしないと力が出ないし、息苦しくなるのです。私たちにとっては無く
てならないもの、命そのものなのです。私たちは自分で生きているのではなく、
キリストの霊と言葉と聖体によって生きているのです。

このように復活とは人間がもっている自然の力ではありません。人間は自分の力
では復活できず、永遠に生きることはできません。復活とはキリストなのです。
私たちはキリストによって復活するのです。彼がエデンの園の中央にあった「命
の木」です。この木から取って食べる者は「永遠に生きる」と書いてあります。(創
世記 3 : 22) このキリストに接ぎ木されて彼と一体になることを復活というので
あり、彼の命と一体になるので死なない者になるのです。彼と一体になるのは来
世でなくこの世からです。教会の洗礼によって人はキリストに接ぎ木され、彼と
一体になり、彼の体になります。だからこの世から復活は始まり、来世で完成す
るのです。私はキリストが言われた言葉「私を信じる者は誰も、決して死ぬこと
はない。」という言葉信じます。病気も災害も戦争も私を殺すことはできません。
肉体は一時的に破壊されますが、私は生きています。松岡和子さんも、山地和家
子さんも、その他の聖徒たちも皆今も生きています。それを証明するために、イ

エス様は墓に行き、墓石を取りのけるように命じ「ラザロ、出てきなさい」（ヨハネ 11：43）と大声で言われました。四日間、陰府の世界、死の世界にいたラザロはキリストの言葉を聞いて、死から命へと、闇から光の世界へと躍り出てきました。キリストに従う者は生き返り、キリストは死者に命を与えることができるお方なのです。

③【死は一生涯かかって準備するものである】

もう一か所、ヘブライ書からお話をしましょう。ここではイスラエル民族のルーツである族長アブラハムの信仰の生涯についていわれています。「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て、喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。」（ヘブライ 11：13）信仰を抱いて死ぬとは、神の約束を抱いて死ぬということです。神はアブラハムに二つの約束をなさいました。それは子孫と土地を与えるというものです。子孫は与えられましたが、土地は彼の生きているうちには手に入りませんでした。それでも彼は喜んだとあります。なぜでしょう。彼は約束をして下さった神は真実な方であり、必ず約束を守って下さることを信じたからです。故に、約束が与えられたということ自体が、既に勝ったようなものなのです。神は必ずその約束を守るからです。

「このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表わしているのです。もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機会もあったかもしれません。ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。」（ヘブライ 11：14～16）アブラハムの人生はその最後まで他国に寄留する旅人として終わりました。それは人間の本質を教えています。人間の本当の故郷は「天国」なのであって、地上は仮の宿に過ぎないのです。人間は皆、出身地、生まれ故郷があります。私にとって故郷は長野です。故郷は自分を育ててくれた場所であり良いものですが、そこに完全な平安があるわけではありません。自分を受け入れてくれる人、自分を受け入れてくれる職場、腰を落ち着けることの出来る場所、平安な場所を求めて私たちは地上を旅し彷徨います。信仰者とは、完全な平安を求めてこの地上を彷徨い、教会にそれを見つけた者のことです。地上には完全な平安、静けさはありません。この世は移り変わるからです。教会は天国の一角であり、天国を垣間見させてくれる場所です。そこには故郷の像（イメージ）があり、故郷の香りがあります。来世こそ完全な安息の地です。だから私たち神の子たちは教会に帰るのです。子どもが故郷に帰るのは当然だからです。

この世の人は、この世が終わったら天国に行くのだと思っています。この世がメインであって、天国はおまけのように思っています。しかし聖書は逆だと言っています。天国がメインであって、この世はそこに入る準備の場にしか過ぎません。

「天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。」（マタイ 25：34）とイエス様は言われました。この世があるので天国があるのではあ

りません。天の国があるのでこの世があるのです。来るべき完全な御国があるので、私たちはこの地上にあってしばしの不完全な教会生活を送っているのです。教会は神の国が来る日までの準備としてこの世に立てられています。キリストが再臨する時、神の国は現れます。最後に実現する世界はこの世のものではなく、神の世界です。ゆえに最後は神を信じて生きた聖徒たちが勝つ世界です。ここにキリストの再臨の時まで忍耐する信徒の底力があります。

●バチカンに勤める尻枝正行神父という人がいます。彼は少年の頃、戦争で父親を亡くし、家も焼かれ、戦後の焼け野原で生きていくために、アメリカ軍の援助で建設中であった教会に釘どろぼうに入りました。ピカピカ光るアメリカ製の釘を急いでリュックに詰めているとき、突然黒い服をまとった外国人に首筋を押さえられました。瞬間、彼は真っ青になりました。まぶたに薄暗い牢屋と悲しげな母の面影が浮かびました。ところが驚いたことに、その外国人は彼を殴ることもせず、捕えもせず、彼のリュックをとって、その中に入るだけの釘をつめ始めました。そして何も言わず、彼を帰してくれたのです。門のところで「足りなかったら、またいらっしやい」と一言言ったきりでした。尻枝少年はきつねにつままれたように、その夜は一睡もできませんでした。他人がくれるものは何でももらう。しかし自分からは何一つ他人にやらない、という戦後の時代に「与える」ことの尊さを教えてくれたあの外人さんのごぼうのような太い指と、どこまでも澄んだ青い目が彼の頭から離れませんでした。明け方、彼は「理想を見つけたぞ」と叫ぶなり跳ね起き、そのまま4キロの道を教会まで走りました。そしてあの外人さんを見つけ「先生、私は陸軍大将になるのはやめました。先生みたいになりたいです。お願いします。教えてください。」と頭を下げたのです。彼の人生の師であるあの外国人は、名をロンカート神父といいました。ロンカート神父はいつも「正行、私は日本の土になりたい」と言っていました。昭和30年2月、東京の育英学園の火事の際、逃げ遅れた彼の同僚を救おうとして火の中に躍り込んだまま、二度と戻ってきませんでした。腕にしっかりと若者を抱いたまま焼け死んでいました。

こんな生き方がなぜ出来るのでしょうか。それはロンカート神父が神の国を目指し、復活を信じて生きていたからだと思います。ある民族のことわざに「私たちが与えたものだけが私たちのものなのだ。隠したものはなくなってしまった。与えたものだけがあなたのものになった。」というものがあります。天に召された人たちの背中を思い出します。人を愛し、人に多くの愛を与えてきたその生き様、死に様を思い出します。私たちも同じように生きなさいと言われていたようです。やがて私たちもこの世を去って彼らの待つ世界に行く時が来ます。残された時間を大切に生き、隣人を愛して、人に与える人生を送りたいと思います。